

第209回くらしの植物苑観察会 2016年8月27日(土)

## － 近代の朝顔ブーム －

仁田坂 英二 (九州大学大学院)

奈良時代に日本へ渡来したアサガオには、長い期間ほとんど変異は知られていませんでしたが、江戸時代になると数多くの変異体が見つかり、アサガオの栽培ブームが起こります。文化文政期の第一次ブームは、比較的単純な形をした見つかったばかりのアサガオの変異体(変化朝顔)を鑑賞した黎明期でした。幕末も近い嘉永安政期の第二次ブームでは、昆虫による交雑で複雑に変異が組み合わさった、種子を結ばない不稔の出物が主に鑑賞されています。

明治になると、他の日本伝統の園芸植物同様、アサガオの栽培は廃れてしまいます。しかし、同好会が作られ、情報や種子の交換が行われるようになると再びブームの様相を呈してきました。最初に大阪で、浪速牽牛社(明治17年;1884)が結成され、東京では明治26年(1893)に穠久会が結成されます。この後、各地で続々と同好会の結成が続きました。第二次ブームの再興の際と同様に、大阪は東京ほど極端に廃れることなく、重要な変異が残っていたようです。

江戸期のブームと近代の第三次ブームの大きな違いは、いろいろな変異を稔性のある「性」と不稔の「筋」に分類する等、より詳細な変異の解析と評価が進んだこと、明治28年(1895)ごろから人工交配の方法が知られ普及

したことです。そのため、鑑賞価値が高く、高い評点の付く4つの品種群(獅子咲、獅子咲牡丹、采咲牡丹、車咲牡丹)に集中して鑑賞・評価するようになり、高度な品種が育成されました。その反面、ブーム初期では評価されていた、手長筋(手長牡丹)や桐(六曜)などの変異は、花卉が乱れやすく整っていない、作出が容易という理由で獅子咲牡丹に取っ



穠久会雑誌7(明治36年;1903) 一六会報告 第8回(明治36;1903)

て代われ廃れてしまいました(右図)。変化朝顔の育種も続けられ、昭和に入ると最高レベルに達するのですが、後述する大輪朝顔の隆盛に相反して変化朝顔の栽培家は減少していきました。采咲牡丹や車咲牡丹は花卉の質(花芸)に影響を与える修飾変異をあまり必要としない

ため、大正期にはほぼ完成しています。しかし、花卉の形に関する修飾変異を必要とし、整いかつ、揃った数多くの風鈴を付ける獅子咲牡丹は最も育種が難しく、良い作品が一定して出品されるようになるのは、大正末期から昭和にかけてです。

第三次ブームで変化朝顔に替わり、次第に発達してきたのが、花の大きさや色彩を競う大輪朝顔です。大きく咲くアサガオというのは早くから探し求められていたようで、当初は乱菊と呼ばれる、曜の数が増えて比較的大きく咲くアサガオが多く栽培されていました。しかし、次第により大きく咲く、曜の長さを伸ばす「蜻蛉葉とんぼば（鋏形葉くわがたば）」や曜の数を増やす「洲浜すはま」変異を持つ品種と置き換わって行きました。洲浜変異は、遅くとも嘉永安政期に変化朝顔の中から生じ、九州で純化され保存されていたらしく、その一部は現在でも熊本で保存されている肥後朝顔です。明治 19 年(1886)に福岡の黒田氏から大阪の吉田宗兵衛まぎすはまばかきふくりん（秋草園）へ渡った「間黄洲浜葉柿覆輪四寸三分咲」の後代から、有名な「常闇とこやみ」というアサガオが生まれました。これが評判となって多方に渡り、交雑した後代から次第に大輪に咲く品種が選ばれました。しかし、蜻蛉葉と洲浜を組み合わせた蟬葉せみばが最も大きく咲くということが確立するのは大正以降になり、大阪の塩飽嘉右衛門しわくが作出した青斑入蟬葉の「御所桜」が現在の大輪朝顔の大元になっているようです。名古屋でも鋏形葉の品種（常闇由来？）と肥後朝顔を用いて独自の育種が行われ、これが京都系の元にもなりました。その後各地の品種は東京へも波及し、現在の大輪朝顔の基礎が築かれました。

洲浜葉の変化朝顔



両地秋(安政2年:1855)  
国会図書館デジタルコレクションより

千鳥葉（洲浜葉）の大輪朝顔



青斑入千鳥葉黒鳩6寸3分(内田山)  
東京朝顔研究会(大正10年:1921)

今回の観察会では、近代のアサガオの第三次ブームの発達について、変異や品種の変遷や特性を主体に、いろいろなエピソード等も交えながら紹介したいと思います。これらの知見は、第四次ブームとも言われている現在のアサガオの栽培ブームを更に発展させ、多様なアサガオを将来にわたって残していくヒントにもなるのではないのでしょうか。

.....

**次回予告** 第210回くらしの植物苑観察会 2016年9月24日(土)  
 「水環境保全に果たす水草の役割」 (千葉県立中央博物館・主任上席研究員)  
 13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要